



「原野」と「湿原」をめぐる風景の文化政治：一九五〇－六〇年代の北海道への旅と観光的視線への抗い（特集1 時間・空間をめぐる文化的想像力と生活空間）

番匠，健一

(Citation)

社会学雑誌, 41:55-80

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503692>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503692>



特集1 時間・空間をめぐる文化的想像力と生活空間

「原野」と「湿原」をめぐる風景の文化政治

——一九五〇—六〇年代の北海道への旅と観光的視線への抗い——

番匠 健一

社会理論・動態研究所研究員

一 道東をめぐる時間・空間論

年末番組「東野幸治は移住したい in 北海道別海町」⁽¹⁾で、自身の調査地である道東⁽²⁾が取り上げられていた。地方移住をテーマに猟師による牧草地のシカ撃ちを紹介しながら、漁協でホタテなどを食べ返礼品を紹介するふるさと納税競争の象徴的な番組である。番組の最後、ヤウシユベツ川の湿原をカヤツクでくだる場面では、ガイドをする移住者が数百年前の人々も同じ自然の風景を見ていたでしようねと言いい、真上からのドローンの空撮に切り替わり川に浮かぶカヤツクを中心に徐々に周囲の風景が広がってゆく。

ヤウシユベツ川の両岸に広がる根釧原野と呼ばれる地域では、泥炭地や湿地などの原野を酪農に有益な空間へと長い年月をかけて改変していった農業開発の歴史がある。戦

前の第二期拓殖計画期にはあいつぐ冷害によって根釧原野放棄論が出るほどであったが、戦後は世銀融資を呼び水にした根釧パイロットファーム事業によってアメリカ製や日本製のブルドーザー、レーキドーザーが導入され、樹々が生い茂った原野の風景は激変した。客土の投入によって土壌は改良され、切り倒された木の根はブルドーザーによって集められ排根線となり、現在は総延長が六四八kmにもなる格子状防風林によって区切られた牧草地が続く独特の風景をつくった。番組を見ていた視聴者の多くや調査者である私など、コンクリートとアスファルトが日常の視野の大半をしめる都市部や郊外の住宅地が生活圏である人々にとって、「牧草地」であつても「湿原」であつても地平線まで広がる緑の草原に解放感を感じる。道東の風景に投げかけられる観光客の視線においても同様に牧草地に「自然」

を感じるだろう。

本稿では、日本帝国崩壊後の北海道東部で農業開発には不向きな不毛な空間とされた「原野」が、一方で科学技術によって改変可能な土地として農業開発の対象となり、他方で「湿原」として風景の価値が付与されたタンチョウが生息する自然保護と観光の空間となる過程を検討する。風景が農業開発や自然保護の結果として物理的に改変あるいは保護される過程と、人々の風景への感性が歴史的に形成されるプロセスを両側からたどることは、地域社会学や観光学のケーススタディとして様々な論点を提供する。

ここでは先行研究と本稿の視角について、第一に冷戦史研究やボーダースタディーズなどグローバルな時空間に関わる領域から、第二に観光（人類）学、社会史、農業史などローカルな地域社会の形成に関わる領域から整理する。

北海道東部は、ソ連が実効支配下におく国後島や歯舞群島が海峡を挟んで横たわり、日本帝国崩壊後は実質的な国境地域であることから冷戦の力学が強く作用する場所である。近年さかんな文化冷戦論では、核軍備や経済体制をめぐる競争のみならず、文学・映画・音楽・芸術をめぐる政治として冷戦を捉えている。キッチン論争からジャズの輸出、ロックフェラー財団と日本文学者、原子力平和利用博覧会と原子炉輸出、農業技術のUSIS（広報）映画と化学肥料・農薬輸出など、文化冷戦論のトピックは多岐にわ

たる。土屋由香は、ラングドン・ウィナーの『クジラと原子力』をひきながら冷戦期の科学技術と文化の結びつきについて、収穫機に合わせた不味く固く品種改良されたトマトを例に挙げている。この議論は農業の機械化にともなう農作物の改変や規格化、あるいは環境の改変について示唆的である。また冷戦社会史、多元的冷戦論ともいべき研究では、とりわけ冷戦期の想像力が重視されている。冷戦という「現実」がいかに想像され実体化したのか、そして無数の人びとが想像力を通じてどのように冷戦に参加したのかという点が論点となっている（益田、二〇一五；益田、二〇二一）。

またボーダースタディーズ（境界研究）は、冷戦体制下での北海道の「境界」をフィールドにした研究蓄積がある。日本では北海道大学スラブユーラシア研究センターに拠点を置き、グローバル化のもとでの空間の脱／再領域化とその境界を多面的に分析する学問領域である。権力、移民、物流、文化など人間生活に関わるあらゆる空間をめぐる紛争を対象にしながら、境界を跨いで暮らす人々の生活にも焦点をあてている点が重要である（岩下、二〇一六；二三）。ボーダーツーリズムの実践においては、北方領土問題に関連する施設を中心にした道東オホーツクツアーも企画された。ディーナー&ヘーガンは、明確な境界として、国境をトランスナショナルな活動の促進と国境安全保障の

強化という開放性と閉鎖性の矛盾する空間的実践としてとらえている一方で、「辺境（フロンティア）」を国境が明確に確定していない曖昧な境界としてとらえている（ディーン・ヘーガン、二〇一五年・三二二〇）。「辺境」がある時は国家間の紛争地でありながら通常は中央から離れた位置にあるが故の「自由」があり、国境を行き来しながら生活する人々の日常に着目する孫歌の議論にも関係する（孫、二〇二〇・一二五―一三〇）。これらの議論は、一般的には国境を持たない国として理解される戦後日本において、稚内―サハリン（樺太）、道東の羅臼・別海・根室―南クリル諸島（いわゆる「北方領土」）の境界地域を考えるうえで有用である。

ローカルな地域社会の観点から空間を見たときに、内地からの移住者たちにとって「開拓」の対象の土地であり、移住者の寄り合い所帯が内地の農村共同体の文化を流用しつつ社会的な紐帯や地域文化を新たに創造する風景の資源でもあった。こうした地域文化を生み出すプロセスにおいては、居住者による日常的な生活をもとにした文化表象と、観光のために訪れる作家や画家など一時的な滞在者の目線による風景の解釈と評価の両方を考慮する必要がある。

ドイツ農業史の足立芳宏は、一九五〇年代から六〇年代にかけての時期を「土とテクノロジー」の深い歴史的転換点と述べている（足立、二〇二二・二二三）。二〇世紀の

農業生産力の飛躍的な増加をもたらした品種改良、化学肥料、農業、トラクターなど農業技術革新と環境史の転換は、ニューディール由来の総合開発の理念のもとに世界規模で農村開発事業が展開し、農学と農業技術が農村に埋め込まれ農村景観の改造や人々の暮らしへのインパクトをもたらした。こうした事業の多くは、戦後の国際秩序のなかで各国の辺境開発として実施され、戦後日本では喪失した植民地を代替する地域として北海道や東北において大規模に実施され、地域の風景を変貌させた。

風景の解釈をめぐる価値基準の歴史的な形成過程については、アラン・コルバンの『浜辺の誕生』における「前浜」の発見と海への感性の変化に関する研究が示唆的である（コルバン、一九九二）。ヨーロッパにおいては、神話的怪物と混沌という聖書的世界観にもとづいた恐怖の対象としての海から、オランダの海景画の出現にはじまり英仏のビーチの整備と観光地化によって浜辺が発見され、海が欲望の空間へと変容する様が風景の評価の枠組みとともにあざやかに描かれている。

北海道の地理的なイメージについては、「観光パンフレットや特定企業の戦略のなかで作りに出された地理的イメージ」が大きな役割を持つことが指摘され、地誌文脈における地理区分の変遷から一九五〇年代なかばに「道東」という区分が登場したことが示唆されている（山下、

二〇〇一・一二二。こうした風景をめぐる感性の変化について、釧路の文学雑誌『北海文学』の同人であった盛厚三は道東の風景をえがいた文学作品の分析を通じて、釧路根室地方に在住する作家と観光のためにこの地を訪れる作家による「湿原」の誕生ともいえるプロセスを描いている(盛、二〇二二)。明治期から昭和初期にかけて、多くの人々によって不毛な泥炭地であり茫漠たる湿地に何も見るべきものはない「原野」であったが、一九三四年の阿寒国立公園の指定とタンチョウの発見に始まる自然保護と観光の対象としての「湿原」への流れを文学、紀行文などから浮き彫りにした。文学作品を対象にした盛の見取り図は、北海道観光のガイドブックやPR映像、大衆的なメディアである映画作品などとともに、道東をまなざす視線を立体的に考えるうえで重要である。

観光人類学では、ゲストとして観光地を訪れる人々が求めるものとともに、ホスト社会がアイデンティティを構築する場として観光現象をとらえている(山下、一九九六)。ゲストとホストの接触のありようは様々であり、自然環境や伝統文化の破壊や植民地主義的な関係性から、観光を通じて「伝統」文化の再創造まで様々である。観光客のゲスト側は、労働の時間に対する余暇の時間の快楽・レジャーの追及、日常とは異なる儀礼的な時間の体験、現代社会の阻害の外部に違う世界や本来のあるべき姿を求める自分探

しの旅、ガイドブックやイメージの組織的生産による場所の消費など、観光行為の目的は多様である。観光とは、日常から離れた異なる風景に対して視線を投げかける行為であり、道東を訪れた人が内地とは異なる風景に何を求め、風景を解釈していったのが重要である。本稿では、観光的な風景の解釈枠組みへの抗いについても取り扱う。

二 不毛の「原野」と日本占領期の道東の旅人たち

戦後、戦災復興を急ぐ内地の都市から離れ、新たな「国境」を見るために多くの記者や文学者、詩人が北海道の東部を訪れている。この時期の道東は、釧路では漁業、炭鉱、製紙業が活気を見せ、一九〇八年一月からわずか七六日間の滞在で石川啄木がつくった「さいはて」の釧路というイメージから離れつつあり、新しい「国境」の街としての根室を訪れる人が多い。訪問者は、フランス文学者の桑原武夫、朝日新聞の札幌支社につとめる本田勝一、吉村昭と津村節子の夫婦、梅崎春夫、堀田善衛など様々である。また街の後背にひろがる根釧原野は、外地を失った戦後日本の内側に「新たなフロンティア」として再発見され、食糧増産と人口吸収のため戦後開拓事業が実施され徐々に入植が進んでいた。

学生時代に山登りのために大雪山と阿寒を訪れていた桑原武夫は、二九年ぶりとなる一九五一年に北海道を訪れた。学術会議の部会と講演会で、札幌、北見、網走、斜里、釧路をまわった桑原は、「一つの土地と人間を理解するためには、そこに生活してみなければならぬ。……。北海道を真に理解しようとするならば、恐らく極寒の候に、開拓村を訪れねばなるまい。近ごろ知名の士の北海道行きは一種流行をなしているが、開拓農民の冬の生活のルポルタージュというようなものは皆無である。日本のインテリとは怠惰なものである」と毒づきながらも、自身の旅もその数を一人増やしただけと自嘲する（桑原、一九六九「初出一九五二」：二九六）。

桑原は、釧路ではそば屋と映画館に立ち寄り丘の上の啄木の碑から釧路港を眺め、原野についてはまったく関心の外である。学生時代に阿寒を訪れていた桑原は、再訪した阿寒湖で遊覧する屋形船のボスターや、床の間や縁側が内地と同じ造りであり、置き屋まがいの温泉街の宿に対して、「自然に付加された人工については、私は多くの不満をもった」と記している（桑原、一九六九：三〇三）。登山家でもある桑原は、阿寒国立公園内の原始林に囲まれた空間にはスイスの山小屋風の質素なホテルのようなものを求めているようだ。ある女性雑誌の北海道特集で「子熊とたわむれるアイヌ」という写真と記事を読んだ桑原は、阿寒で観

光客が子熊と一緒に写真撮影できる土産物屋を、あたかも「自然」の産物とする記事の作為性に「バカバカしくて笑った」と述べた上で、学生時代に訪れた阿寒を想起し「みずばらしいモンペ姿のアイヌの老婆が杖にすがり、口のまわりに入墨した恐ろしい顔をしてたずずんでいたのは、滅びゆく人種の無意識的なうらみの象徴のようで、正視にたえなかった」と自己との隔たりを強調している。

札幌では北方文化研究所の児玉作左衛門の人類学陳列を興味深いとして、海外の最新の学説を参考に「絶滅にちかい未開民族」であるアイヌの研究を徹底的に行うことが望ましいとしている。具体的には、イギリスの考古学者・芸術学者のジェーン・エレン・ハリソンの芸術の起源に関する研究におけるアイヌの熊祭りの再評価や、松浦武四郎の再評価などを提起しているが、植民地主義的な学知を部分的に共有しながら、自身が述べる「一つの土地と人間を理解するためには、そこに生活してみなければならぬ」という言葉とは乖離がある。桑原の言葉を実践したのは、京都出身で編集者として東京で働き、一九六一年から北海道を一〇年以上転々として阿寒の土産物店でも働いた茅辺かのうだろう。後に鶴見俊輔は、茅辺の『アイヌの世界に生きる』を、武田泰淳が『森と湖のまつり』でできなかったことだと激賞した（茅辺、一九八四）。

時期こそ極寒ではないが一九五一年の七月から八月にか

けて高校を卒業したばかりの一九歳の本多勝一が友人二人と北海道一周の貧乏旅行を行っている。道東では、本多は帯広から釧路に入り標茶、弟子屈、斜里、網走と北に抜け利尻島、礼文島を周って帰路についているが、友人は道東へと戻り標茶から中標津、厚床、根室と周ってから釧路と帯広を経由して襟裳岬へと抜けている。本多は、帯広から釧路に向かう機関車の車窓からの風景を書き残している。

「海岸に出るころから霧が晴れた。右手の海岸側には、赤い花をつけたハマナスが群生する砂丘が高く低く波打ち、その向こうに太平洋の黒っぽい海が広がっている。左手は砂質の湿地帯で、たまたま短い草の群落が広がる程度の、どちらかといえばツンドラを思わせるような原野である。耕地はまれに止まる駅の近所にわずかずつ見られるにすぎない。全体として北海道の景観は、宗谷岬と襟裳岬を結ぶ主稜山脈から東側の方が、西側よりも自然の状態が粗放かつ大陸的で、いわゆる「北海道的」だということを聞いていた。」（本多、一九七九・五九）。

本多が見た原野の景色は、短い草がひろがる「ツンドラ」を思わせたようである。また「北海道的」であることを「自然の状態が粗放かつ大陸的」という点は、満州イメージを

戦後の北海道に投影したようでもある。鉄道と並行して走る道路を、海の風に吹かれて自動車が一台きり走っているところなど「なかなかエキゾチック」だとも述べている。その後、釧路から弟子屈に向かう途上に「根釧原野大湿原」にはいった車窓の風景を、「ほとんど枯れかかったアシの類が地平線近くまで茫洋として大地をおおい、視界は空と湿原あるのみである」と表現している（本多、一九七九・六四）。

翌一九五二年七月に釧路に上陸し、根室、宗谷岬、利尻島と礼文島などを旅した堀田善衛は、「国境」という紀行文でもありルポルタージュでもあるような文章を残している。堀田は旅の動機を以下のように記している。

「私は自分が一つの危機に面していることを知っていた。あの長い戦争のあいだ、私はいかなる意味でも戦争に抵抗はしなかった。……。あげくは死んだ真似をした昆虫のような態度で非道な時間の過ぎるのを待った。破壊、解体、死んだ真似、逃亡、戦争が終わった。それが終わっても非道な時間は続き、いまにいたっている。けれども戦争が終わったとき、私は私のなかをなにか巨大なものが通り過ぎてしまった、と感じた。望まれた、空白が来た。具体を捨象され、希薄になり、図式化したものばかりが眼に入るようになって

た。肌がバサバサになった。大きく荒い、そして若い自然を見たいと思つて北海道への旅を計画した。できるだけ都会を避けて荒蕪地や農村や漁村を歩いた。期待は満たされたと云つていい。たとえば釧路原野のような広大な酸性泥炭湿地、つまりは不毛で農作の不可能な、荒涼として清潔な自然を見た。葦やアイヌ藁が生いしげり、川は好き放題な流れ方をしていた。」(堀田、一九九三・四八七)

戦後の「空白」を生きた堀田は「若い自然」を求めて北海道を訪れた。釧路原野は「農作の不可能な」広大な酸性泥炭湿地であり、「清潔な自然」を見出したようだ。昭和二〇年代を戦後の安定しない生活に追われた人々が、釧路湿原という風景や自然を凝視できなかった時代とする盛の研究(盛、二〇二二・七九)に対して、例外的な存在でもある。

堀田は釧路から根室に向かう汽車のなかで、息子がソ連の監視船につかまりしばらく抑留された漁師の話聞く。根室では、海霧(ガス)が「降る」と言つてもいいほど、冷たい霧雨のような湿気が肌に感じられ、いつの間にか眼鏡に露がたまつた。納沙布岬のガスに押しつぶされたか氷河にでも削られたような草原には、千島風露草、ハマナス、朱色のユリ、カキツバタなどが咲いており、海からくるガ

スを遮るものは何もない。ガスが晴れ、目の前にひろがった海景には、「緑の座布団」のような小さな島々があり、海峡の向こうに勇留島、秋勇留島、貝殻島、水晶島のいわゆる齒舞群島を肉眼ではつきりと見たようだ。

堀田は「標識もなにもない海の国境を見るとは、なんとも奇妙な感じ」だと述べている(堀田、一九九三・四八五―四八六)。少年時代から「日本からの脱出」と「社会からの脱走」が自分の空想を最も刺激し続けており、中学生の頃には樺太の国境を見物に行き、「境界標を手で撫でた時の戦慄、息苦しいばかりの動悸は、いまに忘れることが出来ない」と回想している。女優の岡田嘉子と杉本良吉がソ連に亡命し「日本からの脱出」を果たしたのは、堀田の樺太訪問より後の一九三八年である。

ガスが晴れていた海に、太平洋側から再びガスが恐ろしい早さで襲いかかり、海面と青空の隔たりを満たし、眼下の島々を覆いつくした時に、霧のなかで堀田は自身の「肉体」を発見する。

「ソヴェトもなにも一切がそのなかに消えつくしてしまつたとき、突然背筋に予期せぬ戦慄を感じ腹が胸が痛くなり、身をかがめねばならなかった。……。海が消え島が消え一切が無定型の乳白に蔽われ身がかがめていると、それまで頭の中で渦巻いていた自然

という概念、国という概念、人間という概念、それらがある力によって突破されたように感じた。漁師たちの会話同様、不たしかな概念はガスの中へ溶け込み、魚を取り字を書く、行為し労働する肉体だけが存在する……。」（堀田、一九九三・四八六―四八七）

樺太の国境線で境界標に触れたとき、堀田には「自然」、「国家」、「人間」はまったく別々でありながら同時に同一である他にはありやうのないものという前提があった。ここでいう「自然」は、領土や国土とも言い換えが可能な国家に属する地理的な空間である。そして国境を見に行くという行為について「深い感動を呼ぶ」とも述べている。社会からの「脱走」や「脱出」を夢見ながら、自然・国家・人間を単一不可分なものと捉えるからこそ、堀田が国境線の標に触れる行為は自身の身体＝国家の外縁をはじめて確認する行為であり堀田に感動をもたらした。あるいは単純に日本帝国の版図の拡大を、帝国臣民として歓喜したかもしれない。

しかしながら堀田は国境線に沿って森林を切りひらきどこまでも一直線に伸びていた空間に「奇怪さ」を同時に感じていた。日露戦争後、一九〇六年から一九〇八年に行われた日露国境画定事業において、志賀重昂も参加した日口両国の委員会によって測量が行われ、国境線に沿って幅

一〇mで木を伐採し「林空」として緩衝帯がもうけられた（志賀重昂、一九二八）。堀田が感じたのは、国境線の変動という人間の政治によって、自然が物理的に改変されることへの違和感である。

根室の納沙布岬で海霧に包まれた堀田は、自然・国家・人間の概念、それらが単一不可分であるという前提のもとにいた自身が「ある力により突破」されたあとに、「労働する肉体」だけが存在していると述べている。納沙布岬には、「海と魚とコンブと蟹と帆立貝と漁撈労働と牛と馬と空と土と植物」があり、そこには「国境らしいものはない」とつなく、「自然」と「人間」と「労働」だけがあった。単一不可分の「自然・国家・人間」から「国家」が抜け落ち、「労働」が立ち現れている。根室の対岸の水晶島から国後、樺太、函館そして根室へと遠まわりして「奇妙な引揚げ」をした漁師から、ソ連の暮らしや耐寒住宅やサケマス保護について話を聞き、農業・漁業の計画性、集団化、機械化の必要性を痛感したと述べており、「労働」が向かう先をも示唆している。

対して、堀田が「国境」を感じるのとは、根室公会堂の楼上に黒々とそびえる「円筒状のもの」を見上げた時である。「制服の人々」が窓から顔を出し進駐軍が接収しているであろうことを想起させる書き方になっている。根室公会堂は、酒造業とともに蟹の缶詰加工、タクシー会社など

の経営を行っていた碓氷勝三郎⁽⁶⁾が土地を寄付し、一九三一年に完成した。現在は市庁舎の移転にともない取り壊され、跡地はときわ台公園となっている。堀田の文章では、アメリカの国境学の研究者としてオハイオ州立大学の地理学者ロデリック・ピアッティの著書から「国境とはつねに抽象であり、現実的なものであることは稀である」という言葉を引用し、戦後日本において「抽象性」と「非現実性」はアメリカに起因すると述べている（堀田、一九九三：四九二）。阿寒国立公園で偶然会ったアメリカ人から、開拓地の風景を見てなぜトラクターがないのかと聞かれた堀田は、日本の自動車工場がトラクターを作らずに戦車をつくる理由は、アメリカの政策によると応えた。

堀田が根室を旅した一九五二年七月は、朝鮮戦争が膠着状態で見通しが立たない状況であり、日本国内では再軍備論が盛んに議論され、根室では歯舞群島を偵察していたB29の撃墜事件などが起きていた。堀田は、再軍備によって日本側の監視船が武装することにより、ソ連側の拿捕が武力をとまなうて行われることを恐れる漁師の声を聞き取っている。その後、道北の礼文島の香深村の海産物問屋に泊まった堀田は、樺太の喪失後にむしろ景気が良くなったという漁師の声を聴きながら、納沙布岬の先でソ連巡視船と「怪連絡」をした鼠色の日本漁船の情報を流すラジオについて書きとめている。「働く人々にとって国境とは異常

に静かで不便なものであり、監視する人々にとっては異常に騒がしく不安なものであるらしい」（堀田、一九九三：四九七）と書く堀田は、日常的にはつきりとしらない国境の上を行き来しながら労働をする漁師たちの目線から道東の空間を考えている。

二章では一九五〇年代前後に道東を旅した人々を取り上げた。フランス文学者であり登山家の桑原は、スイスに見られるような自身の理想とする「自然」の姿を阿寒に投影し、内地風の温泉宿などはそぐわない「人工」と感じていた。アイヌの土産物屋と観光客の関係性や、「自然」の一部として子熊とたわむれるアイヌをまなざすことも違和感を隠さない。しかし阿寒に一方的に理想を見て、釧路では風景や人々の生活に目を向けず映画館が最も刺激を受けたと述べる桑原の旅は、自身が述べる「一つの土地と人間を理解する」ことを裏切っている。そして桑原にとっては釧路と阿寒のあいだは言及するものがない「原野」であり、釧路湿原は風景が不在の空間であった。

一九五二年に北海道を訪れた堀田善衛は、「死んだ真似をした昆虫」のように過ごした戦争が終わったあとの「空白」のなかで、「自然」を求め北海道を訪れ、荒蕪地や農漁村をまわり、釧路原野の広大な酸性泥炭湿地を見た。堀田の眼には、納沙布岬の草原に咲くハマナスやユリなど草花が映っている。海霧（ガス）が晴れた岬からの海景を見

渡し、再び海霧（ガス）に包まれるという文学的な効果を付与しながら国境を考える堀田は、かつて樺太の国境線で感じた「自然・国家・人間」という単一不可分のものから脱却し、「労働」を発見する。根室の風景は転換をもたらす契機となった。海に向かうの国後島方面でソ連軍の基地建設の爆破音を聞きながら、根室公会堂の進駐軍を見上げる堀田にとって、冷戦構造の力学のもとで生成した「国境」という道東の空間は、境界を越える労働・監視・拿捕によって絶えず揺れ動かされている。漁業者が中心の文章であるが、農漁業の集団化・機械化を痛感しトラクターの導入を提起する堀田の眼には、「原野」を改良する農業開発の目線が潜んでいる。

三 「湿原」のロマンチズムと雑誌『旅』の北海道特集

全国に釧路湿原を認識させる契機として『挽歌』ブームが指摘されている（盛、二〇二二…七八）。作家の原田康子は、釧路図書館に勤めていた鳥居省三が主宰する『北海文学』の同人であり、一九五五年から翌年まで同誌に連載されていた「挽歌」は、映画化が決定後に一九五六年に出版されベストセラーとなった（盛、二〇一一）。

「終戦当時六万だった人口が、一〇年間に倍の一二万に膨れあがり、なお人が増えつづけている街である。市の膨張は、父の言葉を借りれば、千島を失った根室の代わりに漁業基地になったためであり、本州の大資本で水産や化学の工場が建ったためであり、港が整備されつつあるためであり、市の背後に石炭や木材が豊富に産出するせいでもあるらしい。しかし町の明かりの果は、広い真暗な湿原地に呑みこまれているのだった」（原田、一九六一…四〇—四二）

作中では「海霧」が効果的に使われ、ロマンチズムただよう釧路の町のイメージをつくりだしている。戦後の釧路は、中心部は漁業で栄え、西に製紙業の工場が稼働し、東には太平洋炭鉱が操業しており、それぞれの産業と関係した異なる悪臭が立ち込める町で子どもたちは臭いをかぎ分けた。教員として釧路に赴任した三宅敏子は、一九五〇年代の釧路の町について、漁港から魚を満載にしたトラックが辻々でカーブするときに魚を落とし、後続車がそれを踏みつけ腐った魚の匂いで満ち溢れていたと筆者に語ってくれた（三宅、二〇一四）。海霧のロマンチズムは、生活の悪臭をうまく覆うことに成功したようである。現在の釧路は、製紙業は撤退し、漁業も衰退、炭鉱業も技術継承目的のみに縮小された採炭を続けるのみだったが、近年は

石炭の「地産地消」の名のもとに火力発電所が新設され操業している。

『挽歌』のロマンチズムは、日本帝国時代の大連やハルピンのように、釧路や弟子屈の風景をヨーロッパに近づけることで効果を發揮している。

「アサトヌプリは暗い夜の高原のなかに真白な煙を噴きあげていた。その煙はわたしの眼に、デエモンの吐く太い溜息のような不気味で悲劇的なものに映ったのである。そのときわたしは、謂れない兇い予感がわたしのからだをよぎったのをかんじた。わたしは、わたしたちが泊まるホテルをみてもおびえた。雪をかぶった高い針葉樹の森を背にしたそのホテルは、どこか古風なかんじのする鉄筋三階建の、あまり大きな建物だった。ホテルの窓の灯は疎らにともっていた。そのせいかホテルは、北ヨーロッパの森の奥にある、妖婆（ウイツチ）がたたくさん棲んでいそうな、中世期の古城のようにみえたのである。」（原田、一九六一・一二九）

アサトヌプリは、弟子屈の川湯温泉近くにある硫黄山で、摩周湖とセットで訪れられる観光地である。硫黄臭ただよふ煙は、原田によって「デエモンの吐く深い溜息」となり、

温泉宿のホテルは北ヨーロッパの「妖婆（ウイツチ）」が棲む「中世期の古城」に例えられた。

しかし『挽歌』の作品中では「湿原地」はロマンチズムの対象となるより、先の引用では「広く真暗」というような負のイメージを付与されている。そして作品の後半、主人公の不倫相手の妻が自殺する場所は、釧路から北西に位置する酪農地帯である幌呂近くの、「人家も、田園も、森もない一面に枯草のそよぐ低湿地帯」である（原田、一九六一・三三四―三三七）。妻が自殺に使ったカルモチン（睡眠薬）の箱が「野地坊主」の陰から発見されたと聞いた「彼の眼は、絶えずはてしなくつづく原野の彼方をつめていたのである。黄ばんだ銀色の葦と、黒い野地坊主に埋めつくされた荒れた野は、非情な美しさに充ちて無限大に広がっていた。野を横切る送電線の高い鉄塔が、わずかに人が此処にも踏み込んだことを物語っているだけである」とあるように、「原野」とも「湿地帯」ともいわれる空間は、死のイメージをまとった「荒れた野」であり、風景的な美しさは書き込まれていない。戦後憲法にあわせた刑法改正による姦通罪の廃止以降、「性」を扱った戦後文学は既に存在したが、主人公を含む五人がからむ恋愛関係と疑似母娘恋愛という構図のもと不倫恋愛をえがいたことに小説としての『挽歌』のインパクトがあった。

戦後の北海道イメージの素地は、大衆的メディアとして

映画を通して既に形づくられていた。一九五三年に公開された『君の名は』第二部では、摩周湖やアサトスプリ、美幌峠などでロケが行われ、内地とは異なる風景のもとで、奔放で情熱的な性格が強調されたアイヌ女性との恋愛と別れが描かれた。釧路のサークル誌に掲載されていた『挽歌』の単行本化は一九五六年一月で、映画公開は一九五七年九月であるため、小説は映画との相乗効果で人気を高めた（竹岡、一九九一・一八〇）。釧路湿原の風景から美しい「自然」を認識したのは、小説の読者が映画のスクリーンを前に観客となった時である。

阿寒を舞台にした『森と湖のまつり』も、一九五五年から三年間近く『世界』に連載され一九五八年六月に単行本が刊行、同年九月から一〇月にかけてロケが行われ一月に映画化された。映画の冒頭でミルクタンクから牛乳を一気飲みし民族意識に燃えるアイヌの青年を演じた若き高倉健と、アイヌの出自を隠す漁師の息子を演じた三国連太郎の湖を背景にした決闘シーンは、塘路湖のタンネヌタツプ岬で撮影された（『北の映像ミュージアム』推進協議会編、二〇〇九・一八六）。

一九五九年九月に初めて知床半島を訪れた動物文学で知られる作家の戸川幸夫は、「オホーツク老人」を『オール読物』（一九五九年十二月）に掲載した。戸川は一九六四年まで二三回知床を訪れ（戸川、二〇〇八・

四三九）、一九六三年にはタンチョウの取材で釧路湿原にも足を運んでいる。俳優の森繁久彌によって企画化され、一九六〇年三月から六月にかけて羅臼でロケが行われ、同一〇月に『地の涯に生きるもの』として映画化された。映画に際して「オホーツクの舟歌」として森繁久彌が作詞・作曲した歌は、地元で歌われていた民謡「さらば羅臼よ」であり、歌詞を変えた加藤登紀子の「知床旅情」がヒットし「地の涯て」のイメージを更新した。後に倍賞千恵子も「オホーツクの舟歌」のレコードを発売している。一九五七年から一九六〇年にかけて映画の舞台となった釧路湿原、阿寒・摩周、知床の三つの地域は、後に国立公園化しており自然保護の対象となった。

映画や小説のイメージから、読者や実際に観客を観光地へと運ぶのは旅行会社や観光雑誌が提示するツアーや旅行プランである。戦後に日本交通公社（現JTB）から復刊した旅行雑誌『旅』は、一九五五年からは「スキー」「温泉」「国立公園」「夏山」「周遊券旅行」など毎号特集を組み、より実用的な旅の形を提案していた。誌面では、日本国内の未知の空間を写真と紀行文で紹介し冒険心をかきたて、見知らぬ民俗や風土を「異国情緒あふれる」ものとして魅力を紹介した。戦後、政府関係業務や留学、移民のみに海外渡航が制限されており、一九六四年の海外渡航の自由化以降も国内旅行が一般的な時代において、海外への関心を国内

の未知の空間へと向けさせた。スキー特集や北海道特集などによって、道東も頻繁に『旅』誌上に登場する。

原田康子は、一九五八年九月の『旅』に「釧路湿原から摩周湖まで―北海道でもとくに異国的です―」の一文を寄せている。「シベリアか北ヨーロッパの荒地を想像させるこの湿地こそ、釧路地方に特有な風物」として、釧路・阿寒を訪れた人は「ひろがる大湿原に、魂をうばわれるだろう」と書いており、ここでも北海道の風景を北欧やシベリアに近づけて「異国的」に見る枠組みを提示している。

翌一九五九年七月に『旅』は北海道特集を組んだ。根釧原野に三年住み込んでいた野鳥写真家の周はじめ、文芸評論家の亀井勝一郎、原田康子、安部公房、歌手の宮城まり子、アイヌ文化研究家・作家の更科源蔵、同年から『旅』編集長になった岡田喜秋、ゲイ文化研究家で漫画家の富田英三、広尾町で酪農家・画家として知られる坂本直行、児童文学者の石森延男など北海道内居住者を含めて五〇名あまりが執筆にかかわった。ここでは道東の風景にかかわる写真・記事を取り上げる。

巻頭写真では「原生林のなかの青い瞳―然別湖―^{しかりべつ}」として風景写真と湖にボートを浮かべて泳ぐ写真を掲載し、「湖畔の宿が開業している間は、若い都会の男女もやってくる。ことに夏の水浴びが異国的な旅情だ」とある。巻頭写真に続く「グラビア」では、北海道各地の風景が紹介されている。

「初夏にひらく襟裳^{えりも}への道」では昆布干しの労働の写真に続き、黄金道路の風景写真を「砂漠のような百人浜」として、観光バスで移動する観光客と野良着をきて徒歩で移動する地元民のコントラストを写している。「スズランの香は丘からまちへ」では、函館の駅前や盛り場でスズランを売る少年少女の写真、そして函館の女子修道院の一角を「野生スズランの群生地として、異国情緒ゆたかなもの」と紹介している。「トムラウシ温泉探検行」では、激流の上を丸木橋で移動するグループの写真を使い、秘湯への「冒険的興味」をさそっている。「北端の孤島に生きる人々」では、利尻島の海上での昆布採りの様子と浜辺に敷き詰められた昆布干しの写真から、過酷な労働とともに地の果てのイメージをかき立てている。写真は、植生や湖、砂浜、そして昆布漁の労働までもを「異国」的な風景として提示し、未知の奥地への「冒険」心をも誘っている。

北海道特集号には読者K子の手紙「阿寒をふくんだ釧路地方とはどんなところでしょうか」という質問に答える形式で、原田康子による応答が掲載されている（原田、一九五九）。返事を書いている原田は、「傷ついた巨大な獣のうめき声のような、重くるしげな、聞きようによってはわびしくも聞こえる」ような霧笛の音がまさに聞こえており、釧路の町は「乳白色の霧につつまれ、影絵のようにぼうつと、町の輪郭がぼやけて」といると、『挽歌』のロマン

チシズムを反復している。昨年釧路を訪れたS君の「釧路なんて魚くさいだけの町」という言にうなずきながら、釧路は漁業のほか石炭や森林資源にも恵まれ、本州とは隔たった「自然のただけけしさ」があり、開拓の余地が残る「日本のバージニア」だと答えている。北海道に残された自然の象徴ともいべきタンチョウの生息地域である釧路の「湿原」を紹介し、「原始と文明との隣合っているところ」が釧路地方の特徴だとしている。「アイヌに夢を抱きすぎないように」と、観光地に出ているアイヌへの過度な期待や投影に注意しつつも、釧路や網走の博物館に行く方が、「ロマンティックな伝説の世界にあそぶ」ことができること述べている。原田は「釧路と阿寒……あなたの目で、森と湖と湿地」を見る日を待っていると、阿寒の「森と湖」に釧路の「湿地」を加えまとめている。

北海道特集号には、原田と同じく北海道の風景を異国情緒に結びつけて価値づける紀行文が頻出する。写真家の金丸重嶺は、アイスランドのケフェルニクに立ち寄った際、樹木の無い風景に根室を思い出す。また根室はアラスカのアンカレッジの印象とも結びついた。「静寂さというのでもないし、寂しさというものでもない。何か、厳粛な自然の透徹さが、太鼓の水河時代に続くようにも思える不思議な圧迫感ともいえるものである」と、寒い土地に特有の風景の共通点があると指摘している（金丸、一九五九・

八四）。『旅』の編集長に就任したばかりの岡田喜秋は「千島見える涯て地の入江」で、尾岱沼から野付半島を見て感動し、別海の農村地帯にその視線を向け「美しい北国の城——中世紀（ママ）の城のような尖塔をもつこのサイロは、夏の短い北国の労働の結晶だ、ということ」を、修学旅行の少女たちは知っているだろうか」と問いかける（岡田、一九五九・七八）。国後での拿捕について語る岡田は、別海の農村に建てられたサイロを「北国の城」あるいは「尖塔」に見立てた。

山岳写真家の塚本閔治は、網走にて「ギリヤーク人の服装は北欧（ママ）のハンガリー・オーストリアなどに似通ったものがある。女性はコバルト色のスカート。裾には北欧の農民芸術風のシシュウがしてあり、手造りの革ぐつをはいている。北海道で見られるエキゾチシズムのなかでも、新しく、珍しいものといわねばなるまい」（塚本、一九五九・八三）とエキゾチシズムを隠さない。踊りを見せてもらった塚本は、「ギリヤーク」たちの服にヨーロッパのハンガリー・オーストリアの民族衣装と「似通った」ものを発見した。塚本は、阿寒、屈斜路湖、摩周湖などもまわって、大原生林のなかに既に「東京周辺と同じような人臭さが充滿していて、ガツカリした」と述べている。

安部公房の「生きている辺境——私はそこを小説に描きたい——」は、五年後の一九六四年に連載が始まる『榎本武揚』

のテーマの執筆宣言と資料提供の呼びかけ文である。二頁のみの短文であるが祖父母が北海道開拓民であり満州育ちの安部公房ならではの、北海道の風景論を展開しており、『旅』の北海道特集号で重要な作品である。北海道における荒地や牧場など水平な風景をかざるのに、ポプラのような空間を縦に切る垂線は「非常に知的な、そして人工的な印象」であるが、こうした風景は「決して嫌いではない」と安部は述べる。北海道の風景を、「自然」ではなく入植を通じて形成された人工的な風景としてとらえている。そして「自然の風景」について人は思い違いをしていると続ける。安部によれば、「風景を人間の外にある」と捉えることは誤りであり、「人間の外にある自然」などということとはあり得ない。人跡未踏の原始林であっても、それを風景としてとらえる「観察者」がそこに介在しており、「観察者の内部と自然との対立、対話」が、風景の内容であると指摘し、社会史の風景論などに近い視点を提示している。安部はこのように指摘した上で、工業化に立ち遅れた地域に共通な傾向として、北海道の観光PRによる「観光用の風景」は個性的なものや創造的なものではなく、「つまらない」と述べている。対して、自然との対決のために「内部の動きを活発化するような能動的な風景」が北海道には多種多様なものがあるとして、地方ごとに分類を試みる。以下、そのまま引用する。

- 一、日高山脈から西、半島部にかけての比較のおだやかな風景——（牧場やスズランはこの部分に含まれる）
- 二、石狩の泥炭地帯——（この荒廃した風景の中では、よけい人間の存在がくつきりと浮彫になる）
- 三、中部山岳地帯——（私の原籍地である大雪山麓、石狩川上流の上川盆地にある東鷹栖という村だが、このあたりは比較的水田が豊かだということ以外、山については、山の知識がないので他と比較することができない）
- 四、オホーツク海側の、すべてが乾いた希薄な風景——（荒れはてた海岸線、淡い透明な空気、白っぽい海、何かを待ち受けながら、そのまま眠ってしまったようなハマナスの列……その中に、二代目鼠小僧の脱走話や、数々の政治犯たちの栄光ある記憶でかざられた、網走の監獄もある）
- 五、太平洋に面した釧路から根室にかけての、どす黒い風景

（安部、一九五九：四七）

自身が一年過ごした北海道東鷹栖村を含む「中部山岳地帯」は固有の位置を与えられているが、それ以外は、道南、道央、道北、道東の地理区分に対応する分類である。二の「荒

廃した風景」のなかで「人間の存在」が浮き彫りになる及び四の風景描写と網走監獄の「逸話」や「記憶」に関する記述は、「風景」を「観察者」である自身が見た景色と文学作品と取材でえた断片などから作り出していることに自覚的である。そして最後の「道東部の風景」に「心うたれる」ものがあり、四、五年前に一度行ったきりだが「忘れがたい風景」となったと述べている。安部は一九五三年六月に東京から船に乗り釧路に上陸、吉田一穂、更科源蔵らと根室で文芸講演会を行いその後は、旭川、札幌、江差とまわっていた（鳥羽、二〇二四・五一・谷、二〇〇二・四四）。

「綿のきれつ端（パシ）がとびかうような濃霧、海獣が歯痛を訴えているような霧笛、たえまなく吹きまくる東南風。普通の松までが、高山植物のように地面にはいつくばり、風にさらされた木のほとんどが、救いを求めるように、枝をただ北西の方向に向けている。樹木というよりも、使い古した歯ブラシがつつ立っているみたいだ。」（安部、一九五九・四七）

安部は道東の風景に、北海道の入植地の「人工的」な風景ではなく、地の果てのイメージを見たようだ。こうした場所に住みついた人々の過去を思い「めまい」を感じた安部は、一九六四年から連載が始まる『榎本武揚』の構想に

関わる内容を述べ、ここは「生きている日本の辺境」なのだと結んでいる。一九五六年にチェコスロバキアやルーマニアなど東欧を旅し、東欧の民族主義を「国境病」として批判し、同時に「国境に対決した経験が弱い」日本をも批判していた安部にとって（鳥羽、二〇〇七・二一四—二一五）、道東の「辺境」の風景は小説への刺激になった。

三章では、一九五〇年代半ばから六〇年代にかけて文学や映画、観光雑誌の記事から道東の風景がどのような枠組みから捉えられたのか検討した。一九五〇年代後半から道東は、釧路の町と釧路湿原を舞台にした不倫小説『挽歌』、阿寒・塘路を舞台にアイヌの青年の葛藤をえがいた『森と湖のまつり』、知床の番屋から老人と厳しい冬をえがいた『オホーツク老人』など小説のなかで風景がえがかれた。小説は時をたたず映画化され、小説の舞台でのロケはカメラで切り取った北海道の「自然」の風景を映像としてスクリーンを見る観客たちに届けた。とりわけ『挽歌』は、文学作品としては釧路の湿原と阿寒の山々をヨーロッパの風景に近づけて描いた。

戦後、日本交通公社から復刊した旅行雑誌『旅』は、一九五五年から特集を組み実用的な旅を提案するなかで北海道をたびたび取り上げた。とりわけ一九五九年七月の北海道特集では道東を含む北海道の周辺部が取り上げられ、然別湖の水浴びを「異国的な旅情」、襟裳岬の黄金道路を

『砂漠』、函館の女子修道院やスズランの群生地を「異国情緒ゆたか」というように、北海道を「異国」の風景としてまなざす枠組みを提示した。『旅』に描かれた原田康子の記事は、『挽歌』のエキゾチックなイメージを反復しながら、釧路湿原から阿寒までを「シベリアか北ヨーロッパの荒地」にたとえ、釧路を「日本のバジニア」と呼ぶなど、異国の風景として北海道をまなざす観光的目線と強く結びついている。『挽歌』の文学的な評価もここに関わっている。『旅』に掲載された記事は、未踏の山への冒険心をかき立て、先住民の姿にエキゾチシズムや「無垢な自然」を一方向的に期待し、阿寒の原生林に「自然」を期待して失望するという、一方向的な観光の目線が前提になったものが多い。

北海道特集号で異彩を放っているのは、安部公房である。

道東の風景に触発された安部公房は、「観察者の内部と自然との対立、対話」の結果が風景であり、北海道の周辺部には「内部の動きを活発化するような能動的な風景」があると述べた。北海道での生活経験が一年ほどの安部にとって、満州での経験が北海道の風景を解釈する上での距離感をつくっている。生活した上川以外は、地域ごとの風景の分類はおおざっぱであるが、風景が人々に働きかける力学をとらえた点が重要である。さらには道東の風景に触発され、厚岸の湿原から移住者の歴史への想像力をひろげ『榎本武揚』を生み出した。『旅』に見られる北海道を「異国」

の風景に近づけ「自然」や「エキゾチシズム」を期待する一方向的なまなざしの枠組みに対して、安部公房は短文ながら異なる枠組みを提示している。

四 機械開墾による風景の改変

戦後の道東において、エキゾチシズムや「自然」を期待する目線によって「原野」が「湿原」としてまなざされ始める一方、農業開発の対象としても見出された。日本帝国崩壊後に新たな「フロンティア」として再発見された道東では、戦後開拓事業により徐々に入植が進んでいた。原野の風景を大きく変えたのは、世界銀行の融資を呼び水に始まった根釧パイロットファーム事業である。広大な根釧原野のなか別海村の床丹第一地区六六〇八haと床丹第二地区四六一九haが区画指定され、一九五五年から基礎工事が着工した。ブルドーザーやレーキドーザーなど大型機械による開墾を特徴として、入植者には一七〜一八haの土地が分配され、住居や畜舎はあらかじめ建設され、三分の二で牧草、飼料作物を栽培、一〇頭の乳牛飼育という計画であった。

D七型、D八型といったキャタピラー社のブルドーザーやレーキドーザーによる伐根作業に、周囲の村から見学に来た人々は圧倒された。爆破された根は重機によって寄せられ排根線を形作り、独特の風景を生み出した(玉井、

二〇一八…番匠、二〇二〇^⑤。初期の営農設計に問題があり離農者を多く出したが、跡地の農地の統合や新酪農村への移転をへて、現在の格子状防風林によって区切られた牧草地が続く独特の風景がつくられていった。また第三のパイロットファーム計画があった別海村の矢臼別では、軌道に乘らない酪農開発の代わりに自衛隊の演習場が誘致され日本最大の矢臼別演習場となった(番匠、二〇二二)。

根釧パイロットファームがまだ軌道に乗っていない一九六〇年三月に、京都大学探検部、北大極地研究グループ、北大開発研究グループ^③の合同調査が企画された(関、一九六二―六六)。当時は大阪市立大学に務めていた梅棹忠夫は、北海道大学文学部の人類学者富川盛道の誘いを受け、同行している。また京都大学在学中に探検部を創設し、一九五九年に朝日新聞社に入り札幌支社に勤務していた本多勝一も同行している。本多はパイロットファームにいたる風景を以下のように書いている。

「灰色に曇った空と灰色の雪におおわれた根釧原野。そのあいだに雑木林の黒ずんだ地平線がなかったら、ここは見わたす限り灰色の世界である。ときどき通り過ぎるシラカンバやハンノキの林も、本州の高原に見るような甘さはまったくない。すべてが荒涼としている。なにもかも凍り付いている。「日本にもこんな

ところがあったのか」——本州から来た一隊員が嘆息する。「北海道的」という表現をこえて、これは最も「非日本的」な景観だ。秘境とか、絶景とか、日本をあらわすどんなことばも、ここにはあてはまらない。白鳥が二羽だまって低く飛んでいく。純白の大きなこの鳥さえも、美しいおとぎ話よりは、ここに生きるものの生活の厳しさを思わせる。本当の原野とは、こういうものなのだ。非情な自然である。この非情な原野に、やがてポツポツと人家が見えてくる。」(本多、一九七九…一二四)

合同調査は根釧原野で一〇日ほど泊まり込んだのち稚内まで自衛隊の雪上車で走破する計画だった(日野、二〇一五・四六)。一九五一年七月に道東を訪れた本多は「北海道的」な風景にエキゾチシズムを感じていたが、今回訪れた三月は「見わたす限り灰色の世界」であり、「非日本的」な風景や「非情な自然」と表現している。本多は、パイロットファーム関係者の案内で最良農家を周るコースを案内され、「デンマークかスエーデンの農家に來たかと思う」ほどの素晴らしい文化生活に驚いている。一方ではパイロットファームの底辺の農家にも宿泊し酪農経営の厳しさについて話を聞いている。その後、パイロットファームの山岸会の農場を訪れ、「山岸会の精神を「体得」した人ならば、

ここはユートピア」であると述べ、入植者のなかで一番意欲を感じたと書いている。その後、「既存農家」と呼ばれるパイロットファーム以外の入植者の調査のため、沿岸部の尾岱沼を訪れ国後島の漁師だった入植者から話を聞き、それから別海村西部の矢白別第二、西春別拓進などの開拓部落に立ち寄っている。本多は農協資料から、この地域は戦後入植の農家が多く、別海村で最も貧困家庭の多く、長期欠席児童もいると指摘している。

「西別川は広大な別海の原野をぬって、いたるところに凍てついた三日月湖を残しながら根室海峡にそそいでいる。なだらかな低地に広がる湿地帯は、年の暮れから三月中旬まで地下六〇センチほどが凍土層となる。この凍土からしみだす水が、いくつもの支流を作って西別川へ流れてゆく。シカルンナイ川は、そうした支流の一つである。」(本多、一九七九・一四一)

本多は「湿地帯」の地下凍結について書きとめている。根釧原野では、一二月から五月上旬まで地下凍結が続くため、冬季は畑作は不可能な地域である。防風林からの討伐材をめぐるやり取りを見たのち、福岡からの炭鉱離職者の一家、樺太引揚者の夫婦、そして「早期離農する運命」にあるような世帯を訪ねて周っている。

同じ調査に同行していた梅棹忠夫は、調査で見聞きしたことを「日本探検(第三回) 北海道独立論——根釧原野」として『中央公論』一九六〇年五月号に発表している。梅棹は、日本帝国崩壊によってすべての「辺境」を失った内地人は、戦後北海道に新しい「辺境」の夢を追求めたとした上で、北海道もみずから異国に仕立てることによって、戦後日本のなかで新しい価値を発見しつつあると指摘する(梅棹、二〇一四・一五八)。北海道では「異国北海道」や「辺境北海道」と題する本が続々出版され、内地では北海道観光ブームが起きるといふ、双方の動きを見て取っている。

「朝、目がさめると、汽車は海岸線ぎりぎりの波うちぎわをはしっている。北には、凍結した広大な谷地(湿地)があった。……。谷地がうんざりするほどつづいたあげく、煙突が林立し、材木でいっぱいはいきいきした市街、釧路が、まったく忽然とあらわれる。釧路で根室にはいり、厚床でもう一どのりかえる。ここから、ちいさいディーゼル・カーで根釧原野をつきつて、北へはしる。「原野」というと、わたしたち内地の人間は、つい緑の草原をおもいうかべる。だが、いまわたしの眼前にあるものは、そういうイメージとは、はるかにとおい。それは、雪と落葉樹の疎林

におおわれた、はてしない波状地形にすぎない。北海道では、要するに未開拓地のことを原野というのである。未開拓地でさえあれば、草があらうと木がはえていようと、それは問題ではない。北海道には、大原野がいまなおいくつかのこっている。天北原野、勇払原野、篠津原野などとよばれているのがそれである。そして、その最大のものが、根室の国から釧路の国にまたがって展開する、この根釧原野である。」(梅棹、二〇一四・一五九—一六〇)

農地開発機械公団のブルドーザーやレーキドーザーが雪解けを待つて待機している様子を見ている。梅棹は、雪におおわれた広々とした原野に見える空間が、広大な農耕地になつており機械開墾の効果はいちじるしいものがあつたと述べる。機械開墾によつて深く耕された土地で、炭酸カルシウムによる酸性土壌の改良は効果を上げ、原野はみるみる耕地になつた。ここで梅棹はなぜこのような不適各地で機械力によつて強引な開拓が行わたのか疑問を持つ。そして戦後の北海道の「辺境化」の農村版であると述べるが、その含意は北海道をかつての植民地への雄飛の代替地とみなし、エキゾチズムによつてまなざすということである。言い換えればクマやアイヌをシンボルに北海道観光を売り出すのと同様に、根釧パイロットファームも「異質的ポーズ」

のショーウィンドウであり、「本質的には観光性をもった事業」という指摘は興味深い。離農者を含む入植者たちの生活実態よりは、機械開墾による先駆的な開発モデルとして、北海道開発や途上国開発援助の文脈での評価が先行する根釧パイロットファームの位置づけを鋭く指摘している。

開拓地のショーウィンドウで訪問者たちに見せる風景は、最新鋭のブルドーザーやレーキドーザーなど大型農業機械と機械開墾の力によつて改変された土地の風景である。これは映画『黒部の太陽』における最新鋭の掘削機械に心を動かされ、日本各地のダムや発電所など巨大事業を景勝地として訪れる人々の心性に近い。人工建造物や改変された自然を「進歩」の象徴や経済力の象徴としてまなざしつつ、周囲に残された山林や原野を「自然」として同時にまなざす仕組みは、北海道の開拓地においてはより「人工」と「自然」の境界を曖昧にさせている。

さらに梅棹は論を進め、明治以降の歴史と思想を分析し、内地との文化的関連における同質主義と異質主義、内地との政治的関係における統合主義と分離主義という四つの組み合わせから北海道の在り方について思索している。一、異質・統合をケブロン・黒田構想で、異質性を認め独特の文化を打ちたてつつ、強力な中央政府のもとで開発を進める方式、二、異質・分離を河野広道の北海道独立論など北方文化主義者の思想としたうえで、三、同質・統合の

路線として、軍事的植民の思想に注意を向けている。梅棹は、元北海道開発庁長官の鹿島守之助の著書から、北海道はソ連の影響を受けやすく、「赤化防止の見地より」北海道の総合開発は急務であり、北海道を貧乏、未開発のままに放置することは、「政治上・国防上より」大問題（鹿島、一九七五・七）という箇所を引用した上で以下のように指摘する。

「軍事的植民の思想は、いまなおいきている。わたしは、根釧原野をはじめ、現在の北海道におこなわれている開拓のひとつの意味がわかったような気がする。そこには、空虚に対する恐怖がある。無人の空間は、人間によって、日本人によって、つねに確実に占拠されている必要があるのだ。それはまさに「植民」である。立木をきりはらって、そのかわりに民をうるのである。」（梅棹、二〇一四・二二七）

梅棹は、鹿島守之助がシベリア開発よりも早く北海道の総合開発をと叫ぶ意図を、社会的経済的な問題だけではなく、政治的軍事的なものとして読み取っている。「辺境」のショーウィンドウは、内地と北海道のエキゾチズムの共犯関係だけではなく、冷戦下の国境線の向こう側にも向けられていた。機能的なキッチンや宇宙開発の競争と同様に、

農業開発においても機械力を使った大規模な風景の改変が必要であった。鹿島守之助は、テネシー川流域開発公社（TVA）前長官リリーエンソールの言葉を引きながら、北海道総合開発にアメリカ型の「民主化的」な色づけを加えているが、梅棹は北海道総合開発を北海道の住民のためではなく国家への寄与を目的としたものとして批判し、北海道独立論へと繋げている。梅棹の独立論では、内地との異質性を強調する北方文化によらず、農業を重視したものでない、北海道地域主義を提起している。

四章では、別海村の根釧パイロットファームをとりあげ、ブルドーザーやレーキドーザーによる機械開墾による根釧原野の風景の変容を論じた。一九六〇年に北大と京大が合同で行った根釧パイロットファームの調査には、朝日新聞札幌支社の本多勝一や、大阪市立大学に務めていた梅棹忠夫などが同行した。本多は、一九歳の夏に機関車から見た根釧原野の「大湿原」への関心を示し、「北海道的」な風景に感じたエキゾチズムを書き残していた。一九六〇年三月の冬の調査では雪に覆われた「非日本的」な「非情な自然」をみるが、ここは「原野」ではなく開拓地であると述べる。パイロットファームだけではなく、海岸近くの尾岱沼の既存農家や西春別などの戦後開拓部落などをまわり、最も貧しい開拓地の生活を見聞きしておりエキゾチズムが介在する余地はない。また同行した梅棹は戦後日本

で北海道の側が「みずから」を異国に仕立てる様と内地での北海道観光ブームの双方を見ている。農業の不適合地で機械開墾による「強引な」開拓を行う理由について、冷戦下での科学技術による「辺境」のショーウィンドウ化、政治的軍事的な文脈での「占拠」であると指摘している。機械開墾による風景の改変を、農業開発という目的のみに置かない梅棹の議論は重要である。かつて不毛の地とされた「原野」を機械開墾という科学技術の力によって牧草地・耕地へと風景を改変する意味は、冷戦下での海に向こう側からの科学技術のまなざしと内地からのエキゾチズムのまなざしが絡まりあっている。

五 「原野」と「湿原」をめぐる風景の文化政治

本稿では一九五〇年前後から六〇年にかけて道東の原野を訪れた人々の文章から道東の風景がどのようにまなざされ、解釈されてきたのかを論じた。北海道東部は、ソ連が実効支配下におく国後島や歯舞群島が海峡をはさんで隣接しており、冷戦の力学が強く作用する実質的な国境地域である。根釧原野と呼ばれるこの地域に広がる不毛の「原野」として認識されていた空間は、一部がロマンチズムの対象である「湿原」として見いだされ自然保護の対象となり、一部が農業開発の対象となり大型機械による開墾により土

地の改変の対象となった。

一九五〇年前後、北海道の釧路、根室、阿寒を訪れる人々が多かった。阿寒の山と原生林に加え、多くの訪問者が新たな「国境」の街となった根室を訪れたが、根釧原野のなかに「湿原」を風景として価値づけるまなざしは少ない。この時期にすぐれた文章を残しているのは堀田善衛であった。堀田はかつての樺太の国境線で感じた感動と違和感を、納沙布岬の海霧のなかで再考する。根室の風景は、単一不可分の「自然・国家・人間」から抜け出す転換をもたらし、堀田はそこに「国境」ではなく「労働」を発見する。境界を行き来する漁師の労働から絶えず揺れ動かされる「国境」として道東の空間を考える堀田の眼には、トラクターの導入による集団化・機械化という農業開発による「原野」の改良という目線が潜んでいた。

一九五〇年代後半から六〇年代にかけては、原田康子『挽歌』、武田泰淳『森と湖のまつり』、戸川幸夫『オホーツク老人』など文学作品が道東のイメージをつくった。これらの作品はたちどころに映画化され、小説の舞台をカメラで切り取り、北海道の「自然」の風景をスクリーンの向こう側の観客に届けた。とりわけ『挽歌』は、不倫小説としてのインパクトに加え、文学作品としては釧路の「湿原」と阿寒の山々をヨーロッパの風景に近づけてえがいた。北海道の風景を「異国情緒」あふれるものとして描く方法は、

戦後に日本交通公社から復刊した『旅』などの観光雑誌と共通する風景の解釈枠組みであった。本稿で取り上げた一九五九年七月の北海道特集では、道東を含む北海道の周辺部が取り上げられ、北海道を「異国」の風景としてまなざす枠組みを提示した。『旅』に掲載された記事は、未踏の山への冒険心をかき立て、先住民の姿にエキゾチズムを一方的に期待し、阿寒の原生林に「自然」を期待して失望するという、一方向的な観光の目線が前提になったものが多い。この特集号では満州での植民地経験が長い安部公房が異彩を放っており、北海道の風景を観光的な視線で解釈する枠組みから距離をとり、むしろ風景が人々に働きかける力学をとらえている。

戦後の道東において、エキゾチズムや「自然」を期待する目線によって「原野」が「湿原」としてまなざされ始める一方、農業開発の対象としても見出された。世界銀行の資金を呼び水として一九五〇年代半ばから別海村で始まった根釧パイロットファーム事業は、ブルドーザーやレーキドーザーなど大型機械による開墾によって、根釧原野の風景を大きく変えた。一九六〇年、根釧パイロットファームを北大と京大の合同調査グループが訪問した。同行した本多勝一は、三月の雪におおわれた根釧原野の風景を「非日本的」であり「非情な自然」と表現した。また梅棹忠夫は、植民地を失った内地人が戦後北海道に新しい「辺

境」の夢を追い求めたとして、内地からの欲望と北海道が「みずから」を異国に仕立てる共犯的な力学を指摘している。また梅棹は、原野の風景の改変を冷戦下での科学技術のショーウィンドウとして、あるいは政治的軍事的な「占拠」としてとらえたところに独自性がある。

一九五〇年前後には風景が不在であった原野の空間が、一九五〇年代から六〇年代にかけて文学や映画を通じて「湿原」の風景が認識され、北海道を訪れる観光客たちに「異国情緒」あふれるものとして解釈された。本稿では、堀田善衛、安部公房、本多勝一、梅棹忠夫など、観光的なまなざしにあらがう風景論も取り上げた。機械開墾によって牧草地・耕地となった空間は、現在では「自然」とともにある牧歌的な酪農のイメージを投影することも可能である。阿寒、知床、釧路湿原の国立公園と一九七〇年代の新酪農農村計画以降の酪農と原野のイメージの変遷と関わってくるが、今後の課題としたい。

註

- (1) 「東野幸治は移住したい in 北海道別海町」初回放送・ABCテレビ二〇二二年二月三〇日(金)、再放送・ABCテレビ二〇二三年二月三〇日(土)、「ふるラポ 地域とあなたを元気にするふるさと納税」ホームページの番組情報を参照。
<https://furusato-asahi.co.jp/feature/detail/741935aab8d4f8a6cb39acbb388c3068>、最終閲覧日二〇二四年一〇月二五日。
- (2) 「道東」は、本稿では厳密な地理区分ではなく、知床・阿寒摩周・釧路湿原など国立公園と根釧原野などの「自然」、農業開発の対象となる「原野」、いわゆる「北方領土」と境界を接する「辺境」地域など、イメージと実態が重なる空間を指す言葉として使用する。
- (3) 土屋は以下のように指摘している。「一九四〇年代、カリフォルニア大学の研究者らが発明しその後改良が重ねられた「トマト収穫機」は、トマトの収穫を「茎を切り取り、実を振り落とし、……缶詰工場向けの大きなプラスチック・ゴンドラに選別」するところまで全自動で行うことのできる優れたものであった。この機械による収穫に耐えられるように、より「硬く、強く、しかし味の劣るトマトの新種」が創り出された。……科学技術とは「われわれの世界に秩序をつくる方法」であると説明する。ある時代を選び取られた技術は、「人々が働き、意思疎通し、旅行し、消費する方法」に長期的な影響を及ぼす。」(土屋、二〇二二:三)。
- (4) 「稚内・サハリンツアー」として、サハリンの北緯五〇度線の日露国境標石やサハリン郷土史博物館、旧王子製紙工場の廃墟などをめぐるサハリン／樺太の国境観光は好評であることに対し、中標津空港から根室の納沙布岬をまわり網走、紋別、稚内と長距離を移動した道東オホーツク「国境を越えない「国境」ツアー」はテーマのばらつきと、アクセスの悪さで不評だったようだ(岩下、二〇一七:九二)。
- (5) ハリソンの研究は以下を参照(ハリソン、一九九七)。
- (6) 碓氷勝三郎商店の日本酒「北の勝(かつ)」は、根釧地方の居酒屋などで飲むことできるが、小樽の日本酒「北の誉(ほまれ)」とは別物である。
- (7) 日本側の情報との交換によって国境地帯の部分的漁業権を交渉をする「レボ船」の存在は、ベトナム戦争期には脱走米兵を送り出すルートにもなりえた(小山、二〇二〇)。
- (8) 「谷地(野地)坊主」は、山梨や熊本の高原でも見られるが、釧路湿原の風景として知られている。スゲ科の植物が低温のため枯れたまま分解されず地下凍結によって盛り上がり春に新しい芽を出すサイクルを何十年も繰り返し、坊主頭のように高くなったものである。湿原の底なし沼である「谷地(野地)マナコ」、「海霧(ガス)」などとともに道東特有の風景として文学、映画に使用される。
- (9) 京都のある女性史家は、『挽歌』は自身の記憶では戦後をはじめて読んだ不倫小説であり、北海道から出てくることに驚いたと筆者に語ったことがある。
- (10) 現在ではニプフと呼称するサハリン、アムール川流域に居住する少数民族である。戦後、樺太から北海道に引揚げ網走などに居住した世帯もあった。
- (11) 阿部(一九五九、四六一四七)。阿部公房と根釧原野の風景の関係を指摘した研究として、以下を参照(田中、二〇一四)。

(12) 道東には息の長い文芸サークル誌が複数存在するが、訪問者のまなざしを論じる本稿では扱わない。

(13) この調査は北海道大学の関清秀による調査に相乗りする形だったと思われる。

文献

アラン・コルバン、『浜辺の誕生——海と人間の系譜学』藤原書店、一九九二年

足立芳宏、『土とテクノロジー』の深い転換点、足立芳宏編『農業開発の現代史——冷戦下のテクノロジー・辺境地・ジェンダー』京都大学出版会、二〇一二年

安部公房、『生きている辺境』『旅』日本交通公社、一九五九年七月号
岩下明祐、『入門国境学』中公新書、二〇一六年

岩下明祐編、『ボーダーツーリズム』北海道大学出版会、二〇一七年
梅棹忠夫、『北海道独立論』、『日本探検』講談社文庫、二〇一四年（初出：『中央公論』八六九号、一九六〇年五月）

益田実ほか編、『冷戦史を問いなおす——「冷戦」と「非冷戦」の境界』ミネルヴァ書房、二〇一五年

益田肇、『人びとのなかの冷戦世界——想像が現実となるとき』岩波書店、二〇一二年

岡田喜秋、『千島の見える涯て地の入江』『旅』日本交通公社、一九五九年七月号

鹿島守之助、『北海道総合開発の諸問題』はしがき『鹿島守之助経営論選集』別巻二、鹿島出版会、一九七五年

金丸重嶺、『根室から納沙布岬へ』『旅』日本交通公社、一九五九年

七月号

茅辺かのう、『アイヌの世界に生きる』筑摩書房、一九八四年

『北の映像ミュージアム』推進協議会編、『北海道シネマの風景』北海道新聞社、二〇〇九年

桑原武夫、『北海道断想』『桑原武夫全集』七巻、一九六九年、二九六頁（初出『文学界』一九五一年九月）

小山帥人、『我が家に来た脱走兵』東方出版、二〇二〇年
志賀重昂、『樺太境界劃定日記』『志賀重昂全集』六、一九二八年

関清秀、『開拓事業効果調査年度報告書』第一一五号、北海道開発局、一九六二年

孫歌、『移動している辺境』『立命館生存学研究』四号、二〇二〇年
田中里尚、『迷宮としての北海道——安部公房『榎本武揚』から清水博子『ぐずべり』へ』岡和田晃編『北の想像力』寿郎社、二〇一四年

玉井裕志、『排根線』（玉井裕志『玉井裕志作品集』別海印刷、二〇一八年）

竹岡和田男、『映画の中の北海道』北海道新聞社、一九九一年
谷真介、『安部公房評伝年譜』新泉社、二〇〇二年

塚本閑治、『網走でギリヤーク人と海豹を撮す』『旅』日本交通公社、一九五九年七月号

土屋由香、『文化冷戦と科学技術——アメリカの対外情報プログラムとアジア』京都大学学術出版会、二〇二一年

戸川幸夫、『オホーツク老人』小林照幸監修、ランダムハウス講談社文庫、二〇〇八年

鳥羽耕史、『運動体・安部公房』一葉社、二〇〇七年

——、『安部公房——消しゴムで書く』ミネルヴァ書房、二〇二

四年

原田康子、『挽歌』新潮文庫、一九六一年（初出『北海文学』一九五五年六月—一九五六年七月）。

「阿寒・釧路を訪れる若い女性への手紙」『旅』日本交通公社、一九五九年七月

番匠健一、『入植と離散の文学サークル運動——境界地域としての北海道東部』『生存学研究』四号、二〇二〇年、六一—七六頁

「北海道総合開発と地域社会——根釧パイロットファームの再編と自衛隊基地の誘致」、足立芳宏編『農業開発の現代史——冷戦下のテクノロジ・辺境地・ジェンダー』京都大学出版会、二〇二二年

日野舜也、『札幌からアフリカへ——日野舜也会員インタビュー』『アフリカ研究』八六号、二〇一五年

堀田善衛、『国境』『堀田善衛全集』一卷、筑摩書房、一九九三年（初出『群像』七卷十一月号—十二月号、一九五二年—一九五三年）

本多勝一、『初めての旅』スキージャーナル、一九七九年

「北海道探検記」『さざわ書店』、一九七九年

三宅敏子、『愛しき人々』藤プリント、二〇一四年

盛厚三、『釧路湿原の文学史』藤田出版エクスレントブックス、二〇二二年

「『挽歌』物語——作家原田康子とその時代」釧路新書、二〇一一年

二〇一一年

山下克彦、『地誌学よりみた北海道の地理的イメージの変容』『へき地教育研究』五六号、二〇一一年

山下晋司、『観光人類学』新曜社、一九九六年

Alexander C. Diener and Joshua Hegan, *Borders: A Very Short Introduction*,

Oxford University Press, 2012（アレクサンダー・C・ディーナー、ジョシア・ヘーガン『境界から世界を見る——ボーダースタディー入門』岩波書店、二〇一五年）

J.E.Harrison, *Ancient Art and Ritual*, London: Williams and Norgate, 1913.（ジェーン・E・ハリソン『古代芸術と祭式』ちくま学芸文庫、一九九七年）

付記

本稿はJSPS科研費JP20H01587の助成を受けた研究成果の一部である